

# 大学図書館問題研究会 京 都

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

## 第22回京都支部総会開催さる!

7月24日(土)午後5時半よりビヤホール・ミュンヘン(四条河原町)にて第22回支部総会が開催されました。支部委員を含め計11名の参加がありました。

第1号議案「1998年度活動総括及び1999年度活動方針」、第2号議案「1998年度決算報告及び会計監査報告/1999年度予算」、第3号議案「1999年度支部役員選挙」のすべてが承認されました。今回は、会場の設定が討議が十分できる条件を備えているとは言い難く、今後の反省材料にする必要がありました。しかし総会終了後、近くの喫茶店に場所を移し、参加者の交流をはかりました。

### 新支部役員(敬称略)

#### 支部委員

井上雅人(立命館大学総合情報センター)

大館和郎(京都学園大学図書館)

篠原俊夫(京都大学総合人間学部図書館)

田北十生(京都橘女子大学図書館)

竹本文夫(元同志社大学人文科学研究所図書室)

香海沙織(京都大学工学部電気系図書室)

中嶋スエ子(京都大学工学部航空宇宙工学図書館)



#### 監査委員

堤 豪範(京都大学附属図書館)

那須たみ子(京都大学理学部地質学  
鉱物学図書館)

#### 全国委員

篠原俊夫(京都大学総合人間学部図  
書館)

#### <訂正とお詫び>

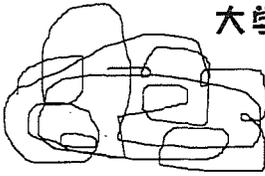
7月号9頁の「野木正紀」さんは誤りで正しくは「鈴木正紀」さんでした。この場をお借りして訂正とお詫びを申し上げます。(編集子)

#### 目次

第22回支部総会開催さる!	1頁
新支部役員	1頁
第30回大会に参加して	2頁
第8回京都研究集会感想	3頁
1998年度決算報告	4頁
1999年度予算	4頁
専門職制度は可能か	5頁
連載小説(20回)リュウ	7頁
数珠つなぎ(41回)	8頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで  
編集気付(kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp) 田北まで

\*\*\* 第30回大会に参加して \*\*\*  
大学図書館問題研究会第30回全国大会



篠原恵子

8月7-9日東京へ行って来ました。今回の記念講演は、近年「イギリスはおいしい」等の著作を多数出版されているリンボウ先生こと林望氏でした。先生は「ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録」を出されているように、本来、書誌学者ですので、当然なのかもしれませんが、「千年以上にわたる文献に関わる仕事にとって、安定したメディアは紙と墨である」といわれ、研究者魂は今も変わらないように思われ、私達は奇をてらわず、図書館員の本道を歩めばよいと感じました。

分科会へは、「資料の電子化」と「オンラインジャーナル」に参加しました。事前にアンケートをとられ、集計結果も出されていました。報告された奈良女子大では、自館に所蔵するものだけでなく、翻刻文を作成したり、地域の資料（宝山寺、元興寺所蔵）を大学のHPに載せたりして、学生等が見てみたくなるHPに加工、編集されていました。業者に電子化を依頼した場合に、マイクロフィルムやCD-ROMを同時に納品されている現状、資料の電子化はどういう目的でやるのか、図書館員がどうかかわっていくのか質問が出されていました。

ナウカ書店からEBSCOhostの説明があり、ゆくゆくはILLにドッキングしたいという構想を話されたり、SD-21が話題になりました。オンラインジャーナルにした場合、バックナンバーをいかにするのか、冊子体との比較、契約方法等、自館での雑誌をどう確保していくのがいいのか、最新の情報を得ることができました。

3日目の主題別分科会は社会系に出席しました。ここでは、池尾愛子氏の「戦後日本の経済学者」の講演がありました。

政策分類で、アメリカの場合は、Journal of Economic Literatureでよいが、日本の政策の分類は当てはまらないので、経済学文献季報を使用した話や、経済審議会の資料を基にして、戦後日本の経済学者として、中山伊知郎の話がありました。

後半は、一人社員の国際書房の社長が、「なぜ専門書にこだわるのか」という熱のこもった話があり、図書館では少ない購入費を有効に使おうと苦慮していますが、図書館をとりまく情勢をも考慮しなければと考えさせられました。出版関係の人の参加も多く、「出版産業への提言」が配布されたりして、こういう資料が手に入るのは、大図研大会に参加した甲斐があったというところです。

常任委員会が関東に移ってから10年たってしまいましたが、熱心な図書館員は、途切れることなく育っているようで感無量でした。ただ、京都からの参加者が5人なのはちょっと寂しく感じました。

(しのはら けいこ 京都大学経済学部図書室)

(追加分)

**第8回京都図書館職員研究集会感想****川崎 千加**

私立短大の図書館に勤めていると、企業で起こっている「倒産」「リストラ」という言葉が、ある程度リアリティを持って捉えられる。

今回の研究集会でも専門性を主張するだけでは、図書館員の地位を守れないという話があった。その通りだと思う。現に大学経営の指導部からは、「図書館なんて、何もしなくていいんだ。ただ開いておけばいいんだ。」という発言が出てくる。ベテランの図書館員が本人の意思を無視して、他部署へ異動させられる。また「アメリカの図書館情報学の修士を出て、語学ができ、司書資格を持った「長期臨時職員」」の求人が当たり前のように出される。図書館学の教員も非専任のような雇用が増えている。

専門性の確立は、雇用が安定しないなかでは、ますます難しくなる。

派遣職員や臨時職員は、経営サイドに立てば、雇用の確保という餌でいくらでも縛りを掛けられるし、辞めさせることも容易。退職金も雇用保険もいらない、安上がりで、優秀な使い捨て人材。こうした雇用形態を労働力と賃金の搾取だと思っているが、いったんそうした雇用形態に慣れた人々は、その気軽さも手伝ってそこに甘んじてしまう傾向もあるように思う。図書館は表面上、それでも回っていく。ただ、新たな図書館像の構築も、大学における図書館の位置づけも、創造し、アピールする権限を彼らは有しない。

こうした多様な雇用形態は、図書館だけでなく社会システムとして捉える必要がある。大学に長くいると、社会の動きの中で、自己の職場としての大学や図書館を捉えてみる視点を、つい実感できないでいる気がする。

以前図書館関係の研究会で、図書館へのさまざまな理不尽な言葉、イメージを一つ一つ検証し、それに対するしっかりした反論を行える力を持つことも専門性ではないかという発言があった。図書館が大学の盲腸になるか、心臓になるかは、図書館員がいかにその経験を生かし、大学にとって心臓部たる由縁をわかりやすく、明確に説けるかなのだろう。

図書館員が図書館にいるからこそできること、図書館員でなければ作れない大学像を描き出す力がほしいものだと思う。

竹村さんが「図書館員を幸せにする」という表現をされたが、「図書館員の幸せ」ってなんなのだろう？と自問すると、メンタルな部分も含めてそれに必要な条件を描えることで、専門職の生きる場所が出てこないだろうか…。

(かわさき ちか 羽衣学園短期大学図書館)

**京都支部報復刻版作成資料提供についてのお礼**

かねてよりご協力をお願いしていましたが京都支部報復刻版発行について、支部報の欠号提供のお願いを、この紙上をお借りしてお願いしていましたが、多くの会員の皆様のご協力により、欠号だった全ての支部報が提供されました。

ご協力いただきました皆さんにこの場を借りて心からお礼申し上げます。(編集子)

## 1998年度 決算報告 (1998/7~1999/6)

## 収入の部

項目	予算	決算	増減	備考
前年度繰越金	96,546	96,546	0	
1998年度会費	136,000	154,700	△18,700	91名
1997年度会費	17,000	15,300	1,700	9名
1996年度会費	0	3,400	△3,400	2名
1995年度会費	0	1,700	△1,700	1名
支部活動援助金	10,000	10,000	0	98年度分
雑収入	0	5,419	△5,419	利息・論文集支部還元
合計	259,546	287,065	△27,519	

## 支出の部

項目	予算	決算	増減	備考
会報	54,000	38,580	15,420	
(内訳) 印刷費	14,000	11,100	2,900	
郵送費	40,000	27,480	12,520	
研究交流集会費	70,000	69,852	148	
(内訳) 新春合同支部例会	20,000	0	20,000	神戸開催
交流集会	20,000	35,014	△15,014	99.3.6
京都研究集会	20,000	25,980	△5,980	99.7.3
支部総会	10,000	8,858	1,142	98.7.17
全国委員会補助	30,000	30,000	0	10,000×3
事務費・通信費	10,000	7,977	2,023	
次年度繰越金	94,546	140,656	△46,110	
雑費	1,000	0	1,000	
合計	259,546	287,065	△27,519	

1998年度は特別事業基金繰り入れは、なし。  
現在の特別事業基金は 780,000円 です。

## 1999年度 予算

## 収入の部

項目	予算	備考
前年度繰越金	140,656	
1999年度会費	149,600	88名
前年度未収会費	8,500	5名
支部活動援助金	10,000	
合計	308,756	

## 支出の部

項目	予算	備考
会報	54,000	
(内訳) 印刷費	14,000	
郵送費	40,000	
研究交流集会費	70,000	
(内訳) 新春合同支部例会	20,000	
支部例会	20,000	
京都研究集会	20,000	
支部総会	10,000	
全国委員会参加補助	30,000	10,000×3
事務費・通信費	10,000	
予備費	143,756	
雑費	1,000	
合計	308,756	

# 専門職制度は可能か



— アメリカの大学図書館における専門職制度から見て —



篠原俊夫

## 1. アメリカの専門職制度を検討することの意味について

日本の大学図書館における職員問題は、見方によってはいかなる意味でも比較の対象とはなり得ないと言える。

アメリカの大学図書館は原則的に有資格者の専門職集団のみによって運営されているが、日本の場合、国立大学の図書館が比較的専門職集団に近い存在である他は、私学の医学図書館に典型的に見られるように特に制度的な裏付けはなくても、他の事務部門との配転を行わず、結果的に擬似的な専門職制度らしきものを敷いている程度である。

日本の大学図書館がアメリカの大学図書館を理想的なモデルとして、常に検討の対象としてきたことは疑いない。しかし、理想の追求は専ら外面的、技術的なものとどまり、専門職制度の根幹に関わる図書館学教育の制度的問題や職員の採用や待遇に関わる問題を根本的に検討する主体がなかった。

## 2. アメリカのライブラリー・スクールにおける図書館学教育の現状と問題点について

黄金の60年代を過ぎて、70年代の末頃からはじまったライブラリー・スクールの閉鎖は1990年6月には名門のコロンビア大学ライブラリー・スクールの閉鎖にまで至り、内外の図書館員に衝撃を与えた。

メルヴィル・デュエイがコロンビア大学に図書館学校を開設したのが1887年といわれているが、ほぼ100年余を経てその役割を終えたことになる。

しかし、本当にその役割を終えたのか、そのことの本当の意味が問われなければならないだろう。学内の政治的力学の問題なのか、学問的位置づけの問題なのか、あるいは職業としての図書館員の需要が減退したか職業としての吸引力が低下したことからくる学生数の減少から必然的に生まれてくる需給関係の結末にすぎないのか、そして現在のライブラリー・スクールはどのように対応しようとしているのかという問題等について検討する。

## 3. 職員集団の現状と問題点について

アメリカの大学図書館が歴史的に強固な専門職制度を敷き、それが時として有能な他分野の人材の参入を妨げるものとして裁判をおこされたこともある。この裁判には勝利して、専門職制度そのものは守られているが内部的に様々の問題を抱えている。

もともと職員集団はALAの認定するライブラリー・スクールで図書館学修士の資格をもつ専門職と、それをサポートするパラ・プロフェッショナル(準専門職)、それに事務職員等からなる。図書館運営の根幹に関わる部分は当然、専門職集団によって方針が決定される。パラ・プロフェッショナルや事務職員が関与することはない。

図書館運営の意志決定に関与できない準専門職は専ら実行部隊として日常業務の遂行にあたらなければならない。

図書館業務の電算化が従来、専門職の仕事であったものが下方に移行して準専門職の仕事になったり、教員身分をもつ専門職として研究業績を求められる事情もあって現場から退く時間が多くなると業務の担い手としての準専門職の仕事上の比重は当然高まり、それに見合った待遇を求める準専門職集団の不満は高まる。その折り合いをどうつけるのか、

また準専門職から専門職にスムーズに移行できる道筋が明示できているのか、これらの問題を日本の大学図書館の現場に対比しながら、検討する。

あわせて、コンピューター技術者やシステム・アナリスト等の他分野の専門職との共存をどうはかっているか、どのような問題に直面しているのかというような問題について検討する。

#### 4. 専門職であることの根拠としての継続研修について

大学図書館問題研究会の元委員長の酒井さんの言では、建築技師の卵達は当初殆ど使いものにならないようなレベルで建築事務所に入ってくるが、専門職集団が手取り足取り教えながら一人前の建築技師に育てていくということである。専門職集団が専門職集団たり得る根拠はまず集団として人材を教育して後継者を育てていく能力であると思う。

図書館専門職の世界でそれはどうすれば可能なか、あるいは不可能なかを検討する。

#### 5. 専門職としてどんな能力を求められているのか、それは歴史的にどう変遷したか

どんな専門職が求められているかということとどんな専門職を育てるかは不即不離の関係である。求人に見合った人材を育てるという観点から図書館員の求人広告を分析してそれに見合う図書館学のカリキュラムを編成することで求職戦線でも有利な立場を確保したいとする動きもある。

図書館員に求められる能力を分析し、それにどう応えるべきかを検討する。

#### 6. 図書館協会の役割について

アメリカの図書館の専門職制度が様々の困難に耐えて存続し得ているのは、ALAの力によるところが大きい。専門職集団の利益のために、図書館の知的自由の擁護のために奮闘してきた。

この役割をになうのは日本においてはだれなのか。日本図書館協会なのか、あるいはもっとあらたな組織があるべきなのか等の問題について検討する。

#### 7. 専門職の世界を取り巻く最新事情と専門職の将来について

マルチメディア、ボランティア、アウトソーシング、パラ・プロフェッショナル、テクノロジーの言葉が反乱する。それらは一見無秩序に飛び交っているかに見えるが、それぞれが有機的なつながりをもっている。それらのもっとも新しいいくつかのキーワードにふれながら最新の問題点を検討する。

#### 8. 日本における専門職制度の可能性について

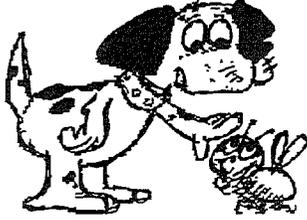
日本の大学図書館における専門職とはどんなものであるべきなのか、それはどのような道筋を経て実現可能なか、あるいは不可能なかを検討する。

#### 9. おわりに

以上のようにアメリカの大学図書館の専門職制度の検討をおこない日本における専門職制の可能性を検討してみたいと考えるが、現段階では殆ど白紙に近い状態で結論めいたものに結びつけることができるかどうかはわからないというのが正直な気持ちである。

また、ここにあげた全てに触れるわけでもないかわりにここに書かれていない事項についても当然取り上げて検討することはあり得る。

(しのはらとしお 京都大学総合人間学部図書館)



# リュウ

西田 治

さすがに夜は涼しくなったとはいえ、リュウと散歩していると汗が滲んでくる。時折吹く風が肌に生気を送り込むようだった。こうやって、リュウと散歩していると気も暗れ、良い運動になるし、暗い所で女性に合っても変な目で見られることもない。むしろリュウを見て、微笑んで行く人さえある。散歩を始めたころは毎日コースを変えて、いろんな道を歩いた。こんな所もあったのかと意外な発見がある。それを楽しんで歩いていたが、そのうちコースも自然と一定してきた。やはり散歩に適した道というものがある。

同じ道でも毎日歩いていると、いろんなものが見えてくる。あの家には犬が二匹いる。私と逆コースを毎日犬を連れて通る婦人がいる。毎日同じ時間にジョギングしている若い女性の二人組がいる。公園の暗い道の角にいつも停まっている変な車がある。といった具合に少しずつであるが地域の様子が分かってくる。リュウの散歩でもなければ知ることなかったであろう家や道がある。

私の散歩コースの中に川沿いの散歩道がある。川岸を整備した立派な散歩用の小径である。所々に休憩所がある。私は、この小径が好きになった。小さな子供連れの母親、老人夫婦、若いカップル、勿論私と同じように犬を連れて人、小学生の集団等が通る。そんな中にどことなく気品のある老人にいつもであった。杖を手に、糊の利いた和服をびしっと着て、下駄を履いて、私と反対の方向からやってくる。毎日会っていると、簡単な挨拶から始まり、そのうち、ちょっとした弾みで挨拶以外の言葉を交わすようになる。その老人の髪は白くなっているがふさふさとしていて、痩せ気味の体つきだが、しっかりした足どりで歩いている。杖など持っているが、全く必要がないのである。

リュウは、女の人と見るとすぐ鼻を近づけて、相手を驚かすのであるが、男の人には絶対そんなことはしない。ところが、例外的に、この老人にリュウが鼻を近づけたのである。老人も犬が好きようで、リュウの頭を撫でた。以来リュウは、この老人を遠くに見かけると、しっぽを振って、急ぎ足になるのである。

ところで、今日は思わぬ収入に気をよくした私は、リュウを連れて遠回りの散歩をし、例の散歩道まで来た。さすがに疲れて、おまけにタバコも吸いたくて、休憩所のベンチに腰を下ろした。リュウをベンチの直ぐ近くの並木に繋いだ。初めリュウは退屈そうで「おい、早く行こうや!」と言わんばかりの顔で私の方を時々見ていたが、やがて、小径の向こうから来る人に尾を振って、一声吠えた。見ると例の老人だった。

老人は近づくと挨拶をして、私の横に腰を下ろした。懐から何かを取り出すとリュウにやった。リュウは、アツという間にそれを食べて、舌なめずりをした。

私が礼をいうと、老人は笑って「いやいや、なかなか賢い立派な犬ですなあ」と云ってリュウの頭をしきりと両手で撫でた。リュウは気持ちよさそうに座り込んで、「もつとくれ!」というように尾を振った。

「私も犬が好きでしてねえ、名前は?」

「リュウと云います」

「ほう、リュウですか! 人なつつこい良い犬ですなあ」と老人は目を細めて云った。

リュウは、どう応えたらいいのか私に助けを求めるように、私の方を見た。

「ええ、まあ、そうです」と私もリュウの方を見て云った。

すると老人が「そこへくると猫と云う奴は、薄情でだめですな!」

{は〜〜あ!}

「忠犬八公ってのはありますが、猫にそんなのがありますか?」

「いません」

「フランダースの犬という童話がありますが、猫にそんな童話がありますか?」

「ありません」

「でしょう! 変な人間より犬の方がよっぽど情の深いところがありますよ」

私は納得した気分になってリュウを見た。リュウは恥ずかしそうに私から顔をそらした。

(次号へ続く)

好評の連載コーナー!!

京都大学大学院工学研究科土木系図書室

ふじやま ゆみ

大図研京都数珠つなぎ 第41回

藤山優美 さん

# こどもと絵本



「内容は何でも良かったから」というのでこの教珠つなぎを引き受けたもの、いざ書くとなら困ってしまっただけで、読むのが楽しい。子供が何となく、転さず、風が吹いても、子供が読めなくても、お祝いするに、職場の方から絵本のセットを戴いた。まだ早いので、そのまますぐに読んであげたい。お祝いするに、職場の方から絵本のセットを戴いた。まだ早いので、そのまますぐに読んであげたい。お祝いするに、職場の方から絵本のセットを戴いた。まだ早いので、そのまますぐに読んであげたい。

1年ほど前に、お祝いするに、職場の方から絵本のセットを戴いた。まだ早いので、そのまますぐに読んであげたい。お祝いするに、職場の方から絵本のセットを戴いた。まだ早いので、そのまますぐに読んであげたい。お祝いするに、職場の方から絵本のセットを戴いた。まだ早いので、そのまますぐに読んであげたい。

絵本といえども乳幼児向けから大人向けまで様々ある上、日頃の疲れのためかカラフルな表紙や中身を見ているうちにクラクラしてきて、結局選べず終いということがあ。図書館職員ではあるが、大学時代に公共図書館の児童室で半日実習した程度では、子供が読んでいるのは全くわからない。私も子供の頃は絵本を読んでくれと母によくせがんだ。離れが、進んで本を読まない子供が増えているのとよく耳にするので、早くから本に親しんで自分から読むことにつまなげられると思うのだが…。私が図書館に勤めてもいることだし…。家の近くに区の図書館があり、小・中学生向けの図書はあつたが、乳児の図書について力ウンターの職員に相談できるような雰囲気ではな。子供は喜ぶように、これには贅沢だらけの立中央図書館のような施設があれ。幸いにしと職場の近くには児童書専門の書店がある。ホームページも公開されていて、こなら色々紹介してくれそうである。一度、昼休みにでも行ってみようと思っている。